

## 「大学改革」と私

本書を読んで、大学の歴史と現状、将来を考えるうえで多くの示唆をえた。「自らの首を絞め続ける大学の苦悩」として、大学設置基準大綱化と教養教育の空洞化、大学院重点化と大学院の質の低下、国立大学法人化と大学間、分野間の格差拡大を挙げている。

このような変化が、大学の内部、各々の学部教授会や教員によって支えられ、結果的には推進すらされてきたことだと。「大学改革」に振り回されてきたわが「大学人生」を振り返りたくなかった。

1967年に信州大学人文学部に入学し、松本で大学生活を送ったが、講義にはあまり出ず、下宿で本ばかり読んでいた。いまでいう「閉じこもり」である。当時、大学紛争が燃えさかり、信州でも学生の声がこだますようになった。

唐突に人文学部改組案が提案され、一方的な「大学改革」に抗議する学生の輪に加わるようになった。「閉じこもり」生活から一転して、自治会役員として活動して疲れ果てたが、その後の人生に大きな影響を及ぼした。

宮本憲一先生の『社会資本論』に憧れて大阪市立大学の大学院を目指したが、当時は「狭き門」のため2年浪人して入学できた。オーバードクター1年で、運よく1979年に名古屋市立女子短期大学に就職できた。「短大差別」など厳しい現実のなかで、4年制大学の創設、「4大化」を目指す取り組みに関わるようになった。紆余曲折を経て、名古屋市立大学の教養部（文化系）と短大が統合して、人文社会学部が設立された。「教養部改革」の流れのなかで、3学科から構成される新学部が誕生したのだ。この間、新学部設立準備委員として多忙をきわめた。私は現代社会学科に属し、現代都市問題や地方財政論、地域政策論などを担当した。学部設立後は大学院の設置準備に奔走することになる。

学部の学科長と評議員などを経て、2004～5年に学部長・大学院人間文化研究科長をつとめた。国立大学法人化の波が公立大学にも押し寄せ、法人化の準備に追われた2年間だった。名古屋市立大学も2006年に「法人化」された。

信州大学に在学中から、名古屋市立大学を定年退職するまで、時代の流れとともに、「大学改革」なるものに振り回されてきた。振り回されたというより、いつしか時代の流れに身をゆだね、改革「推進役」をつとめてきた。いちばん記憶に残るのが、学部長・研究科長をつとめていた頃だ。『名古屋市立大学70年史』に寄稿した「学部長室の窓」をすこし修正して紹介したい。



私が人文社会学部長に就任したのは、2004年4月である。学部長室の窓を開けると、すぐ近くに満開の桜が見えた。寒いときにも、窓とドアを開けっ放し、できるだけ「開かれた」学部長室にした。想定外の「大役」であり、戸惑いの連続であった。当初は教員にメールを出しても反応がなく、気が「めいる」ことも多かった。

最大の課題として取り組んだのが、大学「法人化」に向けた準備である。法人化準備委員会で議論を繰り返し、教授会に問題を提起して「改革」案を取りまとめていった。法人化を前に、目に見える成果を上げることに力を注いだ。教育面では、免許・資格関連の整備拡充である。教員免許の関係で、緊張しながら何回か文部科学省に出向いた。当初は困難とみられた教職課程を立ち上げ、社会福祉士資格も申請手続きを開始することになった。研究面では、人間文化研究所を設立することができた。予算は少ないが、研究所の看板だけは大きなものにした。「看板倒れ」にならないか不安だったが、学内外の研究交流の輪が広がっていった。

私は人文社会学部の3代目の学部長である。学部創設から人大学院・人間文化研究科の設置を経て、「完成」へとすすんだ時期だ。学部・研究科に対し、大学本部などから厳しい目が向けられていた。それで「法人化」準備として学部・研究科の存在感を学内だけでなく、地域社会に広めることに力を注いだ。教育研究両面で地域社会に開かれたものにして、名古屋市との連携にも力を入れた。

学部長2年目の卒業式は、直前に悲しい出来事があり忘れられない。卒業生が帰らぬ人となり、妹さんに卒業証書を手渡した。卒業式の挨拶で、悲しみを乗り越え、「奮闘努力の甲斐もある」人生を送ってほしいと述べた。私にとっても、学部長時代は苦しみもがきながらも、事務の人たちや同僚に支えられ、奮闘努力の甲斐もある2年間だった。学部長室を去るとき、窓の外から満開の桜が見送ってくれた。

(2022年3月12日)